

シリーズ

かほく
市の

文化財 No.50

遺物 編 かほく市の不思議な遺物（3）

今回は、かほく市で出土した不思議な遺物として、かほく市中沼にある中沼C遺跡から出土したガラス小玉を紹介します。

まず中沼C遺跡とは、主に弥生時代後期の方形周溝墓3基、墓と考えられる方に周溝状遺構2基が確認された墓域になります。とり北溝からは、弥生土器（有段口縁の壺1点、小型の有段口縁の壺2点、高环1点、器台1点、小型の無頸壺1点）が一括で出土しました。これらの土器は、祭祀に使った土器群と考えられています。また、第2号方形集溝墓の被葬者が埋葬された穴から、ガラス小玉が出たことも特徴です。

このガラス小玉は複数まとまって出土し、その1つの形状は半透明の青く円筒形で中央に孔が空いており、大きさは直径2~3mmになります。出土した

状況から、装飾品として、ガラス小玉の孔に紐を通して輪状につつなぎにしたものと考へられています。

また背景として、弥生時代前期～少なくとも7世紀までのガラス製品について、大陸（中国や朝鮮半島など）から伝わったものであるというのが研究者の現段階の主な認識です。そして、ガラス製品の成分を分析することで、製品が伝わったとされる説や伝わったガラスを再び溶かして作り直したという説がみられます。

この出土したガラス小玉は、大陸を通じて日本のどこにたどり着き、どうやって中沼まで伝わってきたのかは不明ですが、ロマンのある貴重な文化財といえます。



中沼C遺跡出土 ガラス小玉

現代のビーズのように見えますが、1つ1つがやや不整形で、大きさにはらつきがあることが伺えます。ガラスは当時において貴重であるため、地域の有力な人物が身に着けていたものと考えられます。

